Yamakado News Letter

山門水源の森を
次の世代に引き継ぐ会

守護岩からブナ純林方面 2月12日 午前

中央湿原

北部湿原

イネ科の枯れ茎も倒れずそのまま

うっすら雪化粧の中に見えてくる（未来の）景色

今年は全国的に小雪だったようです。山門水源の森に降った雪も少なめです。計測した範囲では、湿原に設置した積雪計で2月7日の29cmが最大でした。雪不足の影響が心配される一方、山積みの作業や調査が捗っている一面もあります。

さて、上の写真は山頂付近や湿原をドローンで撮影したものです。尾根を境に綺麗に棲み分けた落葉広葉樹と常緑広葉樹が広がりや、暗い色のスギ、明るい色のヒノキといった植林の分布がはっきりわかります。また、湿原では雪に覆われない流路や湿地の様子もよくわかります。

日本のバイオーム（生物群系）は南から亜熱帯多雨林、照葉樹林、夏緑樹林、針葉樹林の４つに分類されていますが、山門水源の森ではその内の照葉樹林、夏緑樹林の両方が観察できる面白い場所です。また開発や遷移によって全国的には消えつつある湿地も、ここでは保全されています。昨年のBBN(生物多様性琵琶湖ネットワーク）のトンボ調査では、県内では希少とされるトンボが幾つか確認されるなど、ここの湿地環境の生物多様性が再確認されました。トンボが確認された場所は再生したミニ湿地からでした。

こうした多様性豊かな自然環境から私たちは様々な恵みを受け取っています。そして、次の世代もその恵みを受け取れるように、できることをやっていかないといけません。

メープル樹液採取体験 2/8
Photo 村田

作業道先行伐採木の搬出 2 /15

劣化した防獣テープ撤収 2/15
Photo 藤本H

山門水源の森2050に向けて

いつもニュースレターでは毎月の保全活動や森の様子をお伝えしていますが、今回はそうした近々の話ではなく、時間の幅をもう少し大きくとった話をしたいと思います。

引き継ぐ会では将来の山門水源の森の姿を視覚的に想像することで、逆算的に今やるべき事を明確にしよう、という取り組みを行っています。いわゆるバック・トゥ・ザ・フューチャーです。森林保全は自然を相手にする活動ですから、そうした自然の将来というと何十年、いや何百年も先を見ないといけないのかもしれません。しかし、人が活動できる年数を考えると、あまり先のことを考えるのは現実的ではありません。とりあえず責任の持てる30年ぐらい先（2050年）の森の姿を想像してみよう、ということから始めています。皆さんも2050年の山門水源の森を想像してみてください。どんな姿が見えてくるでしょうか。

2050年にはこんな森であってほしい、そうしたビジョンが描けると、そこを活動の目標点・到達点、あるいは通過点として考えることができます。そして、そこへ向かうために何をするべきか、どんな活動が必要か、欠けていることは何か、そうしたことが見えやすくなります。見えやすいということは、この森の保全活動に関わる人々に共有化されやすいということです。こうした作業を通じて、皆さんと2050年の山門水源の森を想像しながら、今後の活動を考えていきたいと考えています。これが「山門水源の森2050」の取り組みです。

「山門水源の森2050」初会議　2015.03.07
Photo 藤本H

この「山門水源の森2050」というキーワードが出たのは、2014年12月発行の森だより171号が最初でした。そして最初に会検討会を持ったのは2015年の3月です。その後、会議やワークショップを重ね、時には研修に出かけたり、または講師を呼んでワークショップを行うなどしてきました。最初の会員だけで行なった検討会では、2050年の未来から現在を見るというより、目前の問題や課題に意識が集中する傾向でした。議事録を見ると以下のような課題が上がっています。

- 獣害問題と、関連して人工林管理
- 環境保全学習プログラムの確立
- 指導者向けガイドブック作成
- 軽架線を使った搬出の検討
- 長浜バイオ大などとの連携
- アカガシ林の管理
- 作業道の敷設

(2015.03.07議事録より)

近々の課題は概ね解決済みだが

このうち、保全に関する課題は概ね解決に向けて動き出しているか、解決済みとなっています。ただし、2050年の山門水源の森の姿はまだ描かれていません。それと、これは市民活動などの課題でよく言われる例えですが、積荷と船という話があります。課題を解決するための事業を積荷、それを運営する組織を船に例えています。多くの市民活動では事業（積荷）に意識を集中するあまり、それを運営する組織（船）はさほど意識をしないという傾向があるようです。頑張って活動を続けてきたが後継者がいない、ということが多くの活動組織で問題となっています。立派な積荷を運ぶにはそれなりの船が必要です。2050年へ向かって積荷を乗せて航海を続ける引き継ぐ会という船、これをどうしていくのか。2020年はこのことに意識を集中していく年になりそうです。

きょうとNPOセンター内田氏を招いてワークショップ
Photo 中野 2018.12.15

毎月のニュースレターの他、日々の作業や森の様子などを書いた業務報告をPDFで作成しています。ご希望があればメール添付にてお送りします。ご覧のニュースレター・フッターに記載のメールアドレス宛に、名前とメールアドレスをお知らせください。